作曲のヒント

（七）

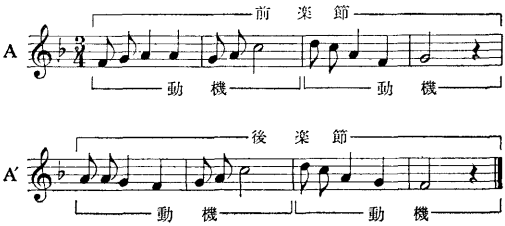
外山友子

楽曲の形式、すなわち楽式のお話まで進んでまいりましたが、どんな短かいうたの曲も、またたいへん長い器楽の曲でも、何かのまとまりのある形をもっていること、つまり、いろいろな形式によって組み立てられているということをこの前にお話しいたしました。

今日は、その中の、リード形式について、もう少し具体的にお話ししたいと思います。

まず、形式としての最小単位である動機（モチーフ）は普通二小節でもって、音楽的な意味を持つ一つの単位となります。この動機（モチーフ）を、そのまま反復したり、少しかわった反復、つまり音程の位置をかえて反復したり、さらに装飾が加わって少し複雑な反復になったり、またそれが拡大延長されたりして発展していくのです。

(21)　「砂　山」



最初の二小節の動機（モチーフ）が、つづいて次の二小節へ連絡しています。そして四小節の一つの小楽節を作っていますので、はじめの四小節を前楽節、あとの四小節を後楽節と分けています。

この前楽節と後楽節とを比べてみますと、前楽節はドミナント（D）で終っており、後楽節はトニック（T）で完全終止をしております。その他は、動機としては、全く別な新らしい動機が現われているわけではなく、後楽節の、ミミレド）は、前楽節の）ドレミミを転倒した反復とみることができます。前楽節をAとすれば、後楽節をBとしてもよいし、Bとする程、新らしい要素がない時はA′としてもよいし、とにかく、AB、またはAA′という楽節の組合わせで、一つの楽曲が完

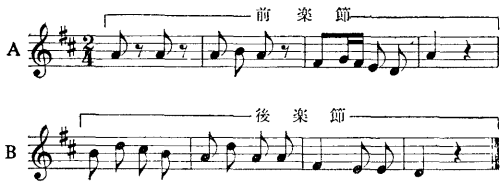
結しているか、または、ひとまず大きな区切りとなって段落となっているとき、これを大楽節といいます。ここまでで終っている一つの楽曲を、一部形式というのです。

上の曲は前楽節Aに対して、後楽節は音程もリズムも、多少変わっていますからBとしました。ABという配置の一部形式の曲です。

Aはやはりドミナントで終って、Bはトニックで完全終止をしています。

このA′にしろ、ABにしろ、二つの楽節は一種の問答をしているような感じを持っています。つまりこの曲でいえば、Aの、ミファミレドソーと問いかけているのに対して、Bがミレレドーと答えて、完全終止をしているのです。

(27) 「ちゅう　ちゅう　ねずみ」

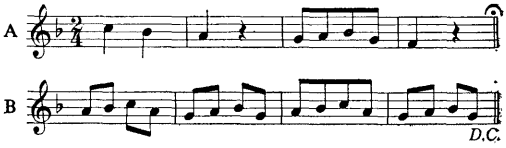


ところが、前楽節Aが、T(トニック)で終って、それが反復して　AAとなるそのAとAの間に、全く別な動機からできた楽節が、はさまれることがあります。この中間的存在を挿入楽節といって、ABAという形になるのです。

このAにはさまれたBは、T(トニック)で終らずに、サブドミナント(S)かドミナント(D)などで、不安定な終止をし、次につづくAの反復の部分が、Bに対する一種の解決となります。ですから、このABAの形は、最初のAは、Aだけで独立しており、あとのAはBの解決として、結局三つの楽節から構成される三部形式ということになります。これを、ダ・カーポ形式といいます。

ABのあとに、Aが繰り返されるこの形式は、みな、三部形式です。楽譜にAをもう一度書く場合もありますが、やはりこれと同じことです。

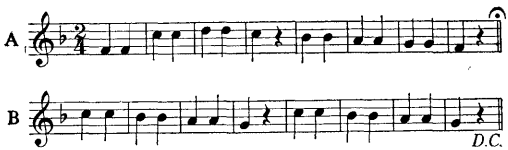
「ドイツ民謡」



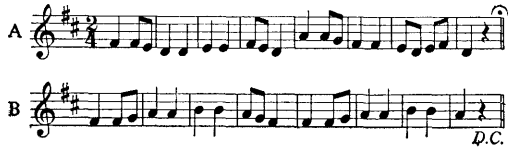
下の二つの曲は二拍子で、AもBも八小節ずつの楽節になっていますが、やはりABAの三部形式です。

次に、次頁の曲は、Aだけでは独立していないのですが、同じよ

「ドイツ民謡」



「むすんで」



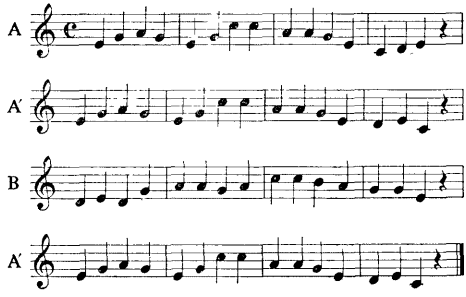
うなA′（Aと全く同じではありませんからA′といたします）がきてうけ答えをして、一応完結しています。次にBが出てきますが、このBは、A′と全く同じ形のA′と結びついて、BA′という完結した形を作っています。ですから、ここに出てきたBは、AとAにはさまれた中間的存在ではないわけです。AA′という完結した部分と、BA′という完結した部分と、この二つの部分からできていますから、二部形式といいます。

この「春の小川」も「ちょうちょう」もAA′BA′という二部形式として最も多い形です。が、次頁の「速いマーチ」は、Bのあとに、A′が来ません。最後の小楽節は、Bの反復と思われるので、B′としました。Aに対しては、A′が応答して、一つの区切りとなり、Bに対してはB′が応答して完結しています。ですから、これも、AA′という部分と、BB′という部分の二つからできていますから、やはり二部形式です。

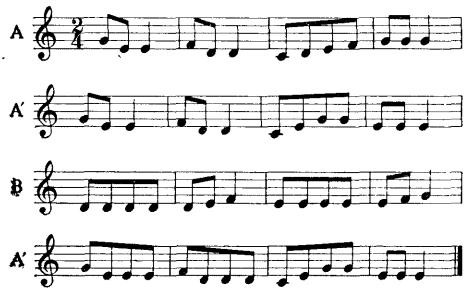
その次のブラームスの子守歌もそうです。

次に、やはり四つの小楽節からできていても、この曲は、ABの八小節で問いかけ、次のABで応答している、ABABという組合わせの二部形式です。

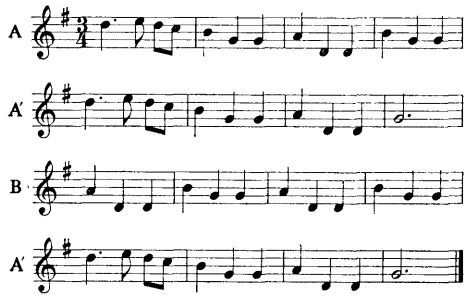
「春の小川」



「ちょう　ちょう」



ドイツ民謡　(16)「影ふみ」



それから、もう一つ、前号でもちょっとお話ししましたが、次の三つの小楽節が、ABCとなる場合があります。

53頁「月」のBは、A

の旋律を変奏し、D（ドミナント）で終っていますから、Aに対しての応答にはなっていません。Cではじめて満足な終止をしており、ABCの三つの小楽節で大楽節を作っています。ただ、ここで、BはAを少し変奏して二倍に延長したにすぎないと考えれば、AもBもCも、何らか共通したものの反復とみることもできますから、ABが問いかけの楽節、Cが応答の楽節という形になりましょう。

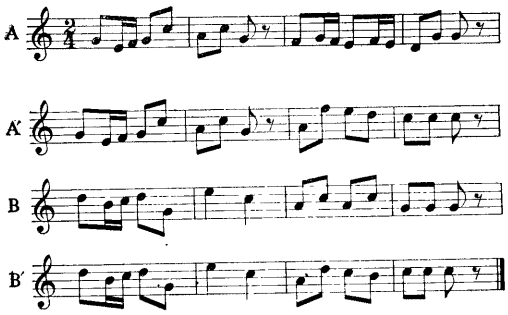
そして、これは、小楽節三つで、一つのまとまりを作っていますから、小三部形式といいます。

「はとぽっぽ」も、この「月」と同じように考えられます。その他、(9)「ままごと」 (12)「たんぽぽ」 (19)「水遊び」 (20)「かみなりさま」 (34)「豆まき」 器楽合奏の方の、(15)「仲よし」 など、十二小節位の曲には、案外、この形式が多いようです。

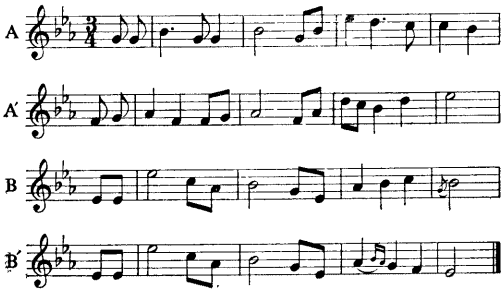
もう一つ、リード形式の中に、複三部形式というのがありますが、これは、ABAという三つの楽節が、その一つ一つが長くなって、それがまた、aba や ab などの形でできているのです。

A（a b a または ab）
B（a b a または ab）
A（a b a）

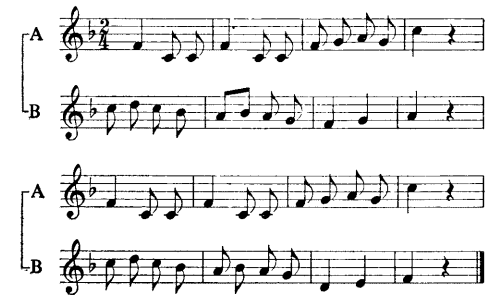
(14) 「速いマーチ」



ブラームス「子守歌」

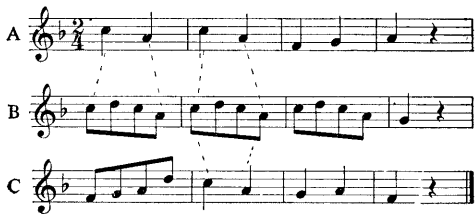


(39) 「おもちゃのマーチ」



これは、メヌエット、ガボット、スケルツオ、行進曲などに用いられる形式で、中間部ともいうべきBの部分は、とくに、トリオといいます。メヌ

「月」



エットとメヌエットの間に、トリオが入る、といったような形式です。

このようにして、Aという小楽節とBという小楽節の組合わせには、いろいろありますし、また反復のし方や、応答のし方にも、ただ音程やリズムだけでなく、そのハーモニーや音の動き方などいろいろな要素が加わってきますと、Aの性格、Bの性格が複雑になり、なかなか簡単に、これはこの形式、というふうに決めつけられない場合も出てきます。

けれども、このお話をはじめた先ず最初に(五月)「チューリップ」の曲を、骨組みだけにして研究してみたことを思い出して下さい。ある曲を見た時に、その曲の、まあ、人間でいえば、その人の帽子やネクタイや、ハンドバッグとか靴などばかり、ジロジロ見ないで、その人そのものを、よく見てほしいということです。そうすれば、かなり複雑で、わからないと思われた曲の形式も、だんだんはっきりしてくるものです。

(注、譜例の番号は「幼稚園のための指導書」より。)

書　評

大西憲明編集　保育診断講座 1
幼児の個性をどうとらえるか

この講座は保育者にとってたいへん興味深い題名をそれぞれの巻がもっている。第一巻は幼児の個性をどうとらえるか、という題で幼児の個人の心理学的特長について、保育の立場を考慮しつつ書かれている。第二巻は困った幼児にどうしてなったかという題で、第三巻は幼児は保育でどうかわったかという興味深い問題を扱っている。この第三巻がおそらく保育の現場教師がいちばん読みたいと思うものであるにちがいない。けれども、そこに到達するのには、まず幼児個人の、あるいは幼児集団の心理学的構造の基本を知らなければならない。間接的で迂遠なようであるが、結局はそれが近道なのである。しかしそのような個人の心理学的理解がそこだけでとどまってしまうならば、保育とどのように結びつくのかわからなくなってしまう。それは保育の実際という観点から見直され、統合されてゆかなければ生きた知識とならないであろう。この講座はそのようなところをねらっているのだろうと推察する。いま私は第一巻を拝見しただけであるが、この第一巻では幼児個人の心理学的問題がひと通り網羅されており、それぞれの問題が常識的平易に流れすぎることなく、しかもわかりやすく解説されている。幼児心理学の新らしい知識を勉強するのには好適の書物であろう。巻末の参考書は親切に選択して載せてあるから、さらに進んで勉強しようとするのにも便利にできている。

これから第二巻、第三巻と保育の直接の問題に入るにつれて、それをどのようにとり扱ってゆかれるだろうかとたのしみにしている。

(津守　真)

黎明書房　昭34　B6
三一四頁　三八〇円